

平成28年 第8回(定例会)

厚真町教育委員会会議録

1 開会

平成28年5月27日(金) 午後1時31分

2 閉会

平成28年5月27日(金) 午後3時40分

3 出席委員の氏名

佐藤 泰夫 伴 俊行 森本 早苗 長門 茂明 兵頭 利彦

4 委員及び傍聴人以外の会議出席者氏名

生涯学習課長 沼田 和男 生涯学習課参事 橋本 欣哉

【書記】学校教育G主幹 木戸 達也

5 会議録署名委員の指名

(伴 俊行)

(長門 茂明)

6 教育長報告

(1) 行事参加等の動向 (資料1)

【質疑なし】

(2) 条例又は規則に定める委員の委嘱 (資料2)

(3) 議会総務文教常任委員会所管事務調査/5月11日(水)/議会会議室 (資料3)

事務調査/厚真高等学校の存続に向けた支援について

【質疑】

佐藤委員長：(2)と(3)について報告がありました。何かあればお願いします。

兵頭教育長：補足するが、今は苫小牧からの生徒は早来までJRで来て、早来からバスで高校へ通学している。新たな方策は、沼ノ端からバスで乗り換えすることなく通学するものである。

この変更案を実際通学している高校生本人や家庭にアンケートをとろうと思っている。乗り換えなしでバスを運行するのだから極力バスで通学してもらうような方向性で示していきたいと考えている。また、負担する経費についてのメリット感も必要であると思っている。

この運行しようとしているバスは1台で想定しているが、現在の乗り合いバスというのは座席が窓側に配置されており、前を向いて乗るバスは路線バスでは現在ないということだ。そうすると実際座って乗車出来る人数は27人。51人の生徒が通学している現状の中で24人が座ることができないで長時間立ったままで通学するのは生徒たちに負担がかかり乗る生徒が少なくなるのではないかと懸念している。その対応策として2台運行してもらうことも視野に入れている。1台運行する経費が約700万円、2台だと約1,200万円程度になる。1,200万円の費用をかけて利用する生徒たちが少ないということになると政策効果自体があまりでてこない。

利用者が負担する経費も、近隣町では助成率は低いがJRのみの使用で負担額が低いこともあり、現行の助成率のままでよいのか、さらに助成額を増額する方がよいのかも検討課題である。

伴職務代理：バスは27人しか座ることができないのは決められていることなのか。

兵頭教育長：決まっている。

長門委員：前を向いて座るシートのバスは路線バスでは使えないということか。

兵頭教育長：今の乗り合いバス（路線バス）はそのようなバスでないと法的に運行できないということだ。高速道路を走る都市間バスは前を向くシート配置だが、そのバスは45人が定員である。

長門委員：そちらにしても、51人全員を乗車させることはできないということだ。

兵頭教育長：乗り合いバスの定員は約70人ということなので、立って乗車するなら定員はクリアできるが、長時間立ちっぱなしになるという問題点がある。

伴職務代理：現在路線バスとして運行しているバスはすべてがそのようなバスを使用しているのか。

兵頭教育長：対面で座るバスをあつまバスでも運行している。

森本委員：苫小牧行きバスに乗車したことがあるが、やはり座席は対面配置のバスであった。

伴職務代理：苫小牧市内を走るバスならわかるが、苫小牧まで1時間以上走るバスもそのようなバスなのだろうか。

兵頭教育長：貸切バスになれば、通常のバスになるが、路線バスは対面配置のバスになる。

伴職務代理：貸切バスにすると経費はどうなるのか。

兵頭教育長：割高になる。

沼田課長：路線バスは運賃収入があるので経費が圧縮される。

長門委員：経費の方がクローズアップされているが、所要時間の短縮という部分もメリットが大きいのではないか。隣町の高校は苫小牧から通学するのにどれほどの時間を要するのか。

木戸主幹：苫小牧駅から40分、沼ノ端駅からだと32分かかる。

兵頭教育長：新たな案は沼ノ端駅前から乗車する生徒は乗り換えがないが、苫小牧駅方面から通学する生徒は乗り換えがある。

伴職務代理：沼ノ端駅を拠点とした場合、苫小牧駅から来る生徒は乗り換えをしなければならない

が、バスに通じる列車はあるのか。

木戸主幹 : 列車の運行時間に合わせた時間としている。

沼田課長 : 帰りは、沼ノ端駅で14分ほど待ち時間が発生する。

兵頭教育長 : 現行の早来で乗り換えの場合も18分の待ち時間が発生しているので待ち時間も短くなる。

沼田課長 : 現在51人ほどの生徒が苫小牧方面から通学している。そのうち約30人ほどが沼ノ端駅、その他の生徒が苫小牧駅から通学している状況になっている。

伴職務代理 : アンケートの結果で利用希望者が少ないと、やめることも考えているのか。

兵頭教育長 : 判断の基準として経費的な負担が予想される。経費的なメリットがあれば乗車してもらえないのではないかと考えている。時間的に不都合がないし乗り換えもないので、最終的には経費負担の判断になるのではないかと考えている。

長門委員 : 提案する以上、現行の経費よりも高くなると説得力がなくなる。

伴職務代理 : 現行のJRとバスを利用する負担と乗り換えのないバスを利用する負担の軽重はどうか。

兵頭教育長 : 沼ノ端駅からでは現行のJRとバス利用での負担が4分3の補助なので、307円で、乗り換えなしのバス利用だと、4分の3補助で6,060円となり、5分4補助で4,848円となる。経費負担も5分4にすると割安感が出てくる。

学校案内に掲載する内容は、今は利便性の向上と額を入れないで負担軽減を図ることとしたい。今後、町長などと政策的な協議をするときには、その辺の折り合いをどこにするか決めていきたい。教育委員会としてはアンケートの結果を含めて協議していきたい。

伴職務代理 : 将来的に生徒を確保することを考えるならば、隣町と同等かそれ以上に割安感を持たせた方がよいと思う。

兵頭教育長 : 来年度の入学者が予想より少なく、次にまた負担額を少なくするというようなことにはならない。政策的な意味がなくなる。やるのであれば、精一杯やり小出しではよくない。

森本委員 : やるのであれば、隣町より割安感がある方がよい。

兵頭教育長 : 政策効果がある投資が必要だ。

来年の本町の中学校の卒業者数は23人と少ない。来年が一番厳しい。

伴職務代理 : 今の厚真高校の現状を考えると約7割が町外からの生徒である。あまり影響がでないのではないと思う。問題はどれくらい町外からの入学があるかということだと思う。

兵頭教育長 : 今年は町内から7人が入学した。来年はもっと町外依存しないと定員の5割を切ることが危惧される。

今年は2次募集に7~8人の打診があったようだが、最終的に入学したのは3人であった。たぶん様々な要素を比較した結果だったと思う。

伴職務代理 : 通学費の助成などは即効性があるが、最終的には中身の問題になると思う。しかし、

理想と現実は違ってくる。

北海道に一つしかない学科を設けるなどの手段をとることはできないのか。

兵頭教育長：そうするには町立の道しかない。道立のテーブルの中では現在のキャンパス校の冠がないと維持できない。

伴職務代理：このままこのようなことが進んでいき交通費などが無料になることも考えられる。

兵頭教育長：いつまでも掛け合い的なやり方を続けていくことは困難だと思う。町として高校をどのような評価をし、必ず存続させるから支援をすとか、この支援をしても入学者が少ないなら諦めるとか、そのような一線を設けなければならないと感じている。

胆振東学区は今後の7年で3～4学級を減らさなければならないと言われている。

教育委員会連合会の総会に参加した際、十勝管内ある町の教育委員長と同席した。

その町は通学費や給食費など直接・間接的に毎年7千万円を高校に助成しているという。

伴職務代理：それで状況はどうか。

兵頭教育長：絶対数は減少傾向にあるようだが、2間口校で52～53人の入学者のようだ。町としても今の規模くらいがちょうどよいようだ。人が増えれば支援する額が増加するということもある。学校の方も1学級25～26人で少人数指導ができるとともに、先生も2間口校の配置数があるので恵まれている。

伴職務代理：何も比較するものがなかったらメリット感があるが、他と比較されると複雑になる。

町外からの生徒のこともあるが町内の苫小牧の高校へ通学する生徒への補助との関係も考えていかなければならないと思う。

兵頭教育長：委員会に提出する資料の打合せの際に町長とそのような話をした。町長は町から町外の高校へ通学する生徒には別な施策的な観点で考えていくようだ。補助率が同率になるのか差をつけるのかは未定である。

佐藤委員長：町内の生徒で厚真高校から通学する片道6キロ以上の者に対しては、年額16,000円を上限に助成しているがこれも変えていかなければならないのではないかと。

木戸主幹：町長とのヒアリングの中では、変更する方向性の話をした。案としては町職員の通勤手当に準拠した額を想定している。

伴職務代理：負担が軽いことに越したことはないが、それば理事者側が了承するかはわからないので、町の財政事情もあり最大限の施策を行ってもらいたいと思う。

沼田課長：乗り替えない路線バスの利便性や経費のメリット感を理解してもらい、どれだけ利用するのかアンケートの結果が大事になり、検討材料になっていくと思う。

伴職務代理：アンケートには負担する数字を掲載するのか。

兵頭教育長：現在は負担額は記載できないが、ある程度負担が想像できるようなものとしたい。

佐藤委員長：乗り換えをしないバスのほかに、生徒たちが登下校できる方法はあるのか。

沼田課長：既存のJRとバスの利用になり、助成率の4分の3は残る。

兵頭教育長：2つの路線をどのように利用するのかではなくて、新しい路線を設けて利便性を高め

るのであるから、全員が乗車してもらうようにしてもらうべきだと思う。

長門委員：沼ノ端まで路線バスを延長した場合の改正案を運行した場合、現行のJRとバスでの通学方法への助成がなくなることが理解されるだろうか。

兵頭教育長：その部分がわかり、こちらの姿勢が伝わるようなものとしたい。時間的な短縮や負担感の緩和がわかるようにしたい。

伴職務代理：強引な感じはするが、新しい路線には助成はするが、現行の路線には助成しないという伝え方ならどうなるだろうか。

兵頭教育長：JRとバスの魅力感がどのくらい違うのだろうか。経費の部分もあると思うが、JRは乗り心地などがバスより魅力があるというような。

木戸主幹：沼ノ端周辺の生徒には利便性はあるが、苫小牧駅から通学する生徒がこのバスに乗車してくれるかどうかポイントだと思う。

伴職務代理：苫小牧駅から通学する生徒は、やはりJRとバスの定期が必要で今と変わらない。

森本委員：隣町が運行している無料バスは苫小牧駅から運行しているのか。

木戸主幹：駅やイオン前など何カ所から乗車できるようだ。

兵頭教育長：2台運行していると聞いている。

長門委員：アンケートのとり方は難しい。

伴職務代理：このままだと4分3助成と5分4の助成が混在する可能性がある。

兵頭教育長：委員会でいただいた意見を参考にしてアンケートを作成してみる。

伴職務代理：教育長が言っていたように、バスを選択してもらえるようなアンケートの方がよいと思う。この案は改善するという点で出ているものなので、なるべく移行してもらえるようにすべきではないか。

長門委員：現行の苫小牧駅から早来駅まで通学している生徒が、改正案のバスに早来駅前から乗車することは可能なのか。

沼田課長：厚真ー早来間を沼ノ端まで路線を延長するので早来駅前では乗車することができる。

長門委員：苫小牧駅から通学してきている生徒たちは、今までどおりJRで早来駅まで来てもらい、そこでこのバスに乗車するという選択肢もある。

伴職務代理：通学経費に係る助成が複雑になるかもしれないが、可能性はある。

木戸主幹：長門委員の考え方は想定していなかったが、そのように乗車したい生徒がいると思う。苫小牧駅から乗車してくる生徒は早来駅まで乗ってくるほうが便利かもしれない。

伴職務代理：厚真ー早来間の運賃は高いので、その区間の助成を4分の3から5分の4のかさ上げしたらよいのではないか。

長門委員：改正案による一本化は理想だと思うが、今現在JRで苫小牧駅から早来駅まで来ている生徒は、早来駅前で乗車できるバスがあるのであれば利用すると思う。

佐藤委員長：アンケートはいつごろ実施予定か。

沼田課長：6月に実施予定である。

長門委員：改正案を見ると、経済的負担感の軽減と時間短縮で良いと思が、アンケートの作り方

が難しいと思う。全員が沼ノ端駅からバスに乗るような提案の仕方が難しい。

兵頭教育長：全員に乗車してもらうなら、助成を乗り換えのないバスの方に集中化するような呼びかけになる。時間と経費負担に優位性のある改正案に魅力があるかどうかなので、その部分をアンケートで明らかにし、町長と協議していきたい。

伴職務代理：平成20年度から町内と町外の入学者数が逆転している。平成19年度までは地元からの入学者の方が多かった。20年度からキャンパス校になっている。これには意味があるのか、もしくは単純に地元の卒業者が少なくなったのが要因だろうか。

兵頭教育長：中学校卒業者数は平成20年度も55人いるのであまり変化はない。21年度が49人、22年度が30人台に推移している。

伴職務代理：60%の地元率が20年度から30%台になっている。

木戸主幹：おそらく議員の意見は、キャンパス校になったのだから、募集停止が近いという思いを子どもたちなどが抱き、志願が減ったということなのではないかという意味合いがあると思っている。

伴職務代理：現実もそうであったのか。

木戸主幹：そこまでは把握していない。

兵頭教育長：5%枠がなくなった時期や高校無料化の時期とも関連しているのでないか。時期については後で調べてみる。

佐藤委員長：確かに一時閉校になるのではないかという風評もあった。

兵頭教育長：キャンパス校になったのは20年度からであったが、指針が策定されたのが18年度なので、高校のあり方については以前から議論されてきたこともあり、そのニュースは地域内に様々なものがあつた。最終的に厚真高校はキャンパス校で落ち着いた経緯がある。

そのような議論の中で厚真高校がなくなるのであれば、厚真高校に進学しないで町外に進学した方がよいという意識が働いたのかもかもしれない。

7 所管報告

学校教育グループ

(1) 英語教育推進委員会（4月28日開催）について (資料4)

(2) 学力向上推進委員会（5月12日開催）について (資料5)

【質疑】

佐藤委員長：学校教育グループから2点の報告がありました。何かあればお願いします。

伴職務代理：英語教育推進委員会の議案書の中で、低学年・中学年・高学年・中学校の目標がそれぞれある。小学校では「活動状況」として記載されているが、中学校の目標の部分では、「表現能力、理解の能力」と記載されている。記載内容は活動状況と変わらない。何か意図があるのか。

兵頭教育長：小学校は外国語活動と言っている。だから活動としている。中学校は教科的に英語科・

外国語科としており、単なる活動ではなく身に付けたものをアウトプット中心に学習していることによる。特例もこれで指定されており、本町の目指す姿を図にしたものである。

伴職務代理：地元高校に進学する子どもたちは少ないが、図によると中学校目標の次に高等学校の目標があり、「小中学校の英語活動を高校で高め花を咲かせる」とある。これは厚真高校を前提に考えているものか。

兵頭教育長：高校は限定していない。しかし、現在、文科省の教育指導の中で域内小中高の連携の取り組みについて触れられている。厚真町の英語教育の構想段階ではそのことは触れられていなかった。厚真高校もスタート時から研究活動に参画していたが、まず、小中学校の素地ができていないのにいきなり高校にまでとはならないだろうということ。なので、その時点では多様な高校を想定していた。

伴職務代理：今後も多様な高校とするのか厚真高校とするのか。

兵頭教育長：現在は小中学校の取り組みが進んでいるので、厚真高校にも取り組みを入れてもらおうという動きになっており、厚真高校で英語のコミュニケーション活動が行われている。

伴職務代理：厚真で行っている英語活動というものを、できれば広く、例えば子どもたちが進学している学校に伝えていくことも必要ではないかと思っている。厚真高校に進学する子どもだけでなく、他の高校に進学する子どもたちもいる。進学した高校に厚真の子どもたちはこのような英語活動を行ってきたんだということを伝える手出をを考えていかなければならないのではないかと少し思っている。

兵頭教育長：やはり、高校はまったく別なものになる。町外の高校に進学した厚真の子どもたちは、高校でもALTのネイティブな発音にもついていっていたりと、小中学校で慣れているので、高校でもその素地が活かされている。研究大会でも他から来た先生にオールイングリッシュで授業を行っている様子に驚かれる。

伴職務代理：その通りだと思うが、私が言いたいのは、高校との連携を考えるとすればやはり厚真高校になると思う。しかし、現状の本町の中学生は20～30%の厚真高校への進学の中で、どのように連携を考えていけばいいのかということだ。

兵頭教育長：厚真高校では英語の活動の割合は減ってしまうので、小中学校で培った素地を移行してもうまくいかないと思うので、一部を入れてカリキュラム活動など行ってもらうようなイメージを持っている。また、厚真高校もそのような意識で活動し始めている。本町においても小中で連携した活動を行っているが、中学校の姿は本町自体もまだ明確化していないので、今年や来年の研究大会ではっきりさせていきたいと思っている。

伴職務代理：町外に進学する子どもたちも、すばらしい財産を持って進学している。連携というよりも紹介という形がとれないかと思った。

兵頭教育長：研究大会に高校の先生が来てもらえればと思うが、なかなかそうはいかない。また、高校は研究活動自体が少ない。先生の独自性が優先されている。

町外の高校に進学した子どもたちの英語科における状況を把握しながら、本町の英語活

動が高校でうまく結びついているのかも確認してみたい。また、今年、厚真高校に着任した校長先生は英語専門であるので、そのような視点で本町の中学英語もみて欲しいと伝えている。

社会教育グループ

- (1) 埋蔵文化財発掘事業作業員辞令交付／5月11日（水）／シヨロマ1遺跡発掘現場事務所／45名
- (2) 放課後児童クラブの現状について (資料6)

【質疑なし】

8 議案

議案第1号 厚真町学校運営協議会設立準備委員会要綱の制定について

【質疑】

佐藤委員長：議案第1号厚真町学校運営協議会設立準備委員会要綱の制定について説明がありました。質疑をお受けいたします。

佐藤委員長：質疑がないようですので、議案第1号厚真町学校運営協議会設立準備委員会要綱の制定について決定してよろしいでしょうか。

全委員：異議なし

佐藤委員長：それでは決定させていただきます。

沼田課長：6月14日に初回の設立準備委員会の開催を予定している。6月の定例教育委員会の中で報告をさせていただく。

長門委員：学校運営協議会の設立予定の用途は。

沼田課長：平成29年12月を目途と考えている。

9 その他

- (1) 北海道市町村教育委員研修会の開催について (資料7)

と き 7月7日（木）午前10時20分

ところ 札幌市教育文化会館

※委員長以外についての出欠の報告は、後日、委員から事務局へ報告する。

10 次回委員会の開催日程

- ・6月29日（水） 午後1時30分（予定）

11 閉会